ブラウニングの詩心

中野正順

(一) 劇的独白の契機

ブラウニングは、シェリー称讃の詩「メモラビリア」(一八五五)によっても分るように、一生シェリーの崇拝者であった。殊に彼の処女詩「ポウリン」Pauline(一八三三)はシェリーの影響から書かれたものであった。彼が十三歳のとき、古本屋で「クイーン・マッブ」Queen Mab(一八一三)を含んだシェリーの詩集を求め、若々しい革命的情熱のシェリーの詩風はいたくブラウニングを感動させ、その影響によって彼自身も一時は所謂無神論者になり、その結果シェリーへの讃辞(トリビュート)として書かれたのが「ポウリン」だったのである。

ブラウニングは「シェリー論」Essay on Shelley(一八五二)の中で、先ず詩人を客観的詩人 Objective poet と主観的詩人 Subjective poet の二種類に分ち、「客観的詩人」とは、それが仮令人間的なものであれ、風物的なものであれ、外的事物 things external を人間と関連して描写する。彼は「形作る人」fashioner であって、彼によって形作られたもの、即ち彼の詩は、彼によって投影された独自的 substantive にして明確な distinctive なものである。だから吾々読者は「オセロ」の創造者がその事実をどう考えていたか、その事実をどう説明しようとしているのかと云ったことはどうでもよいのであって、詩人の創作力によって、その事実そのものを吾々に最初の創造として与えよ

うとするのである。それから先は、読者である吾々の智恵による解釈にまかせるのである。これに対して第二の「主観的詩人」は、彼が描こうとするものは、地上の人や物よりも、絶対真理の体現者である唯一者 the One above に関連せしめる。人間の見る所のものではなく神の見る所のもの——プラトンの所謂観念(イデア)、神の手の中に燃えている創造の種子——彼が努力するのはこれに向ってである。彼の関知するものは諸々の現実的人間の姿ではなくして、人間のもつ根源的要素である。即ち彼は自分が立っている所を掘り下げ、そしてかの絶対精神に最も近い反影としてその要素を自分の胸中に求めることを好み、またその絶対精神を直覚して心に感得したものを発表しようとする。ここに吾々は一種の神秘主義(ミスチズム)を感じる。こう云った二種類の詩人の区別は便宜的なものであって、ブラウニングはこれに関して「この区別は、二種類の詩人の能力に関する区別でなく、また何れが優秀(ハイアー)であるかと云うのではなく、寧ろ対象を各詩人の目的に適用しようとする際の彼等の適応性 adaptability の区別である」と云っている。だから、実際問題として、絶対精神を相手とし、観念(イデア)とか自然を素材とする主観詩人と、人間の行動と効果を探ってこれを素材とする客観詩人とは、それ等の素材を互にそれぞれの目的に交換して用いることがある。このことに就いてブラウニングは「この二つの詩的能力は、特別の詩人に於て、継続的に展開して出現することもあるが、普通の場合は、この二つが混合してどちらか一方が他を圧しているのである」と云って、シェリーの内にこの二つの特性の混合を眺め、而かもその立っている所を深く掘り下げて生命の泉を汲み、自らの胸を探って魂の永遠の相を見出そうとする、こう云った沈潜的な所に詩歌の根本的法則を見出す詩人がシェリーであると云っている。

ここに於て、筆者は「詩の弁護」Defence of Poetry (一八二一) に於けるシェリーの言葉をいろいろ憶い出す。

例えば

(一) 詩とは「想像力の表現である」the expression of the imagination と云い、人間をエオラス琴 Aeolian lyre にたとえ、内外の印象と云う風(かぜ)によって奏でる旋律の外に、琴とは別にかきたてられる音と動きをその印象に直覚的

に調節せしめて諸調音 harmony を生み出す一つの原理が人に内在していると云う。

㈡ そして「詩は、永遠の相の下に表現された人生の映像そのものである」A poem is the very image of life expressed in its eternal truth. とか、「詩作品は、万人の精神の影像に他ならぬ造物主の精神に内在する人間性の不易の形式に則って、作の筋の動きを創作したものである」(a poem) is the creation of actions according to the unchangeable forms of human nature, as existing in the mind of the Creator, which is itself the image of all other minds. と云い、

㈢ また「詩は、人間性を以て神性に滲透する」It is as it were the interpenetration of a diviner nature through our own.

こう云ったシェリーの詩的想像力のあり方は、「想像力」と云う言葉を用いなかったけれども、またブラウニングの詩人に関する主観性の姿であり、彼の詩に対する理想でもあったのである。かくしてブラウニングは「シェリー論」に於て、シェリーのうちに認められる全詩人としての職能を

一、宇宙、自然、人間の不完全のうちに完全な姿を見抜く鋭い悟性の力、

二、自力の周りにある一時的善や美の姿に誘惑されず、芸術上の因習主義に満足しない心、

三、この世の美や善の奥に眼を向け、そこから将来人間を向上させる実体を見出す力

であると述べ、高い絶対精神を求めて止まない憧れと地上の人間性との調和統一の姿をシェリーの内に見出している。これはまたブラウニング自身を述べているのである。

こう云ったブラウニングの詩人の本性を彼の作詩によって跡づけて見るならば、第一に彼の処女作「ポウリン」Pauline は、ゴッドウィン Godwin やフランスのコンドルセ Condorcet 等の革命思想をうけて、社会改良の熱情に燃えて合理的完全を求めていたシェリーの影響によるものであって、「ポウリン」に描かれている若い詩人は、徒ら

に凡ゆる知識と経験に対する止むなき憧れに捉われた人物で、彼は一つの高い力との関係に於て強い想像力が働いて自意識過剰となり、その結果孤独に陥入り無神論者となって人生に失敗する。只最後に愛人ポウリンが示す愛の慰めによって、無限の愛の力の必要を始めて覚ったのである。次に「パラセルサス」Paracelsus（一八三五）に於ては、詩人エイプライル Aprile は「ポウリン」の詩人と同じように最後に愛の力を覚るが、異る所はその愛に関連して自我意識が過剰になり、只無限に愛される、そして愛しようと云う憧れに捉われ過ぎ、それを実現する手段を欠いて失敗する。即ち一方は凡ゆる知識や感情の美を求めようとし、他方は人々がおぼろげにしか認めていない美を与えることによって、凡ての人から無限の愛をかちえようとする憧れを抱く。何れもそれぞれの過剰意識に沈せんした詩人である。

所がソルデロ Sordello は、これ等に対して第三の型に属する詩人である。彼は、エイプライルの持つ愛への情熱的憧憬と、「ポウリン」の詩人に見られる自己中心の態度との両者を具えて人生に出発し、社会生活に接触することによって「ポウリン」の詩人の自己中心的なものと、エイプライルの有つ広く人間に通じる社会愛的なものとが融合統一された人物である。「ソルデロ」も亦人生に於ける失敗物語になっているが、その最後の場面で、前述「シェリー論」に見られる全詩人の有する職能のように、詩人の行くべき道は、宇宙、自然、人間の不完全のうちに完全な姿を見出すことによって、即ち宇宙の絶対の相の下に於て広く世の人々を愛して行く点にあることを覚ったのである。爰に私共が注意しなければならないことは、このソルデロ型の詩人にあっては、彼を詩的創造に駆るものは只単にエイプライル式の人類愛への憧憬ではなくって、それを通じて或る高いものに連がろうとする抑えることが出来ない詩人の意志の力である。ここに於て筆者は、詩は想像力の表現であると云ったシェリーの云う想像力と、ブラウニングが有する想像力（彼自身はそれを想像力とは云わかったが）なるものとを比較する興味にかられる。

「詩の弁護」に於て、シェリーは「詩は常に愉悦を伴う。詩が降り立つ程の精神は、凡て自ずから開いて喜悦を交

えた慧智を受容する」Poetry is ever accompanied with pleasure; all spirits on which it falls open themselves to receive the wisdom which is mingled with its delight. と云い、それから「ホーマーは当代の人々の理想的完徳を人間化したのだし、又彼の詩篇を読んだ程の人々が眼醒されてアキリーズ、ヘクター、ユリシーズたらんとする向上心を抱くようになったと我々は信じて疑わない。友情、愛国心、不屈不撓の目的貫徹心の真と美とがこれら不滅の創造人物には、徹底的に顕れていたのだ。聴く者の情感が、こうした偉大で愛すべき人物に共感を覚えて洗練拡大され、引いては讃歎が模倣となり、模倣から進んで歎賞の対象と同化するに至ったことは疑を容れぬ事実である」Homer embodied the ideal perfection of his age in human character; nor can we doubt that those who read his verses were awakened to an ambition of becoming like to Achilles, Hector, and Ulysses; the truth and beauty of friendship, patriotism, and preserving devotion to an object, were unveiled to the depths in these immortal creations: the sentiments of the auditors must have been refined and enlarged by a sympathy with such great and lovely impersonations, until from admiring they imitated, and from imitation they identified themselves with the objects of their admiration. と云って詩の与える愉悦が*道義的効果を生むことを述べ、更に進んで「道徳体得の要諦は愛である。つまり己が本性から逸脱して、自己のものならぬ思想に、行為に、若しくは人物に内在する美と自己とを一体化することだ」The great secret of morals is love; or a going out of our own nature, and an identification of ourselves with the beautiful which exists in thought, action, or person, not our own. と云って、シェリーが力強い愛の詩人たることを自ら裏付けているが、これは亦ブラウニングが「ソルデロ」の内に展開した彼**の詩心でもあったのである。

* 詩の道義的効果と云っても、シェリーは赤裸々な道義的企図を詩の内におりこむことを云うのでなく、詩によって読者の脳裡に道徳的にも優秀な美的理想形態を自らしみこませようとしたのであって、詩が故意に正邪の観念を露出したり、宣伝

の具となって道徳的教訓を強制することを排斥したのである。即ち詩は、情緒的或は想像的刺戟を手段として、知性の推理作用をば道徳に向うべく自ら覚悟して行くのである。

＊＊　ここに筆者は、ブラウニングの人間愛のうちにシェリーの影響を見る。この愛がブラウニングの詩の主題となって居り、また彼の手紙の中で、人間を助け、励まし、慰めることが詩人の最高の目的と職能であると云い、そのためには美や真を人々に伝えねばならない。併しこれは完全な姿で伝えることは出来ない。それは人々の心のうちに発動すると考えられる不完全な個々の美や真を、永遠の相との関係に於て、作中の個々の人物の心や、その言説のうちにあらわれるようにする。ここにブラウニングの作の呈する劇的文体 dramatic style の契機がある。

シェリーは、こう云った詩のもつ愉悦と道義的効果から愛の精神への展開には「激しい何ものをも包含する想像力を働かさねばならぬ」 must imagine intensely and comprehensively と云っているが、彼の場合、詩を生む想像力の姿に就いては、同じく「詩の弁護」の中で「詩人とは一羽の夜鶯（ナイチンゲール）で闇に坐して己が孤独寂寥の慰めに、妙な音色で唱うものである。その音に耳を傾ける者は、姿見えぬ楽人の調べに恍惚となり、心動かされて心和むと感じながらも、それが何処から来るのか、何故かを知らないのである」 A poet is a nightingale, who sits in darkness and sings to cheer its own solitude with sweet sounds; his auditors are as men entranced by the melody of an unseen muscian, who feel that they are moved and softened, yet know not whence or why. と云い、詩の愉悦は何処から来るのか分らぬ、即ちそれは神来的なものだと云う。また「詩とは、至福、至善の精神の、至善、至福の瞬間の記録である……だがその足跡は、風が来れば姿を消し、後にはただそれが踏んだ砂上に皺をとどめるだけの洋上の風のようなものだ」 Poetry is the record of the best and happiest moments of the happiest and best minds.....but its footsteps are like those of a wind over the sea, which the coming calm erases, and whose traces remain only, as on the wrinkled sand which paves it. と云って詩の法悦は瞬間的たることを述べ、更に、

「詩は人生の闇夜におとずれる消え易い霊感を捕捉し、言語或は形態に包んで人類の間に放ち、同じく霊感が心内に棲息する人々に、同類同胞の喜びの麗しい消息を伝える」 Poetry arrests the vanishing apparitions which haunt the interlunations of life, and veiling them, or in language or in porm, sends them forth among mankind, bearing sweet news of kindred joy to those with whom their sisters abide と云って、詩的創造力或は想像力は神性なものから霊感の形で詩人に働くものと考えているが、これはブラウニングの様に、自己を通して絶対的なものに深く沈せんしようとすることなく、只神性なものと自分との結び付きは霊感という形を以て片づけ、寧ろ彼の想像力は広く人類への共感の方向に強く働いている。だから同じ愛の上に立つと云っても、ブラウニングの場合は、その想像力は広く人類に及んで個々のうちにそれぞれの美を発見する（そしてこれを劇的（ドラマティック）に表現する）が、同時に「ポウリン」の詩人的なものが発動して、その個々のものを掘り下げて深く沈せんしようとするブラウニング特有の主観性が存在するのである。

シェリーの詩論の中枢は、何と云っても、想像力にある。これは、詩の存在理由として強調された精神的機能であった。殊に十九世紀の初頭の知的進歩の時代は、シェリーに取っては詩的精神が死に瀕した時代であった。彼自身もその初期には、プラトンと同様に、完成は美であると考え、先述したように、当時のゴドウィンやコンドルセ等合理論者の影響により、理性により完成に向おうとしたモラリストであった（この時代のシェリーの作「クイーン・マッブ」の影響によって出来たのがブラウニングの「ポウリン」であることは前述の通りである。）。所がシェリーは、後になって理性よりも想像力を重視して、想像力と観念的真理の世界との関係を認めたのであるが、それは前述のように、ブラウニングに較べて頗る感性的なものである。その外、当時の想像力に関する詩論では、先ずリリカル・バラッズの序文に於けるワーヅワースの言葉である。「想像力は知的レンズであり、この媒介によって詩的観察者は形象と色彩を修正し

て観察対象を見るのである。換言すれば、想像力は劇的場面を独創的に装飾するもの、かくて劇中の人物は新たな衣裳を纏い、斬新な態度におかれる。更に換言すれば、化学的作用であって相異の最も甚しい元素と起源の隔絶した元素が混合せられて調和的、同質的全一体となって行くのである。」と云う想像力を以て詩的創造精神とする解釈から、次に見られるのは*コウリッヂの哲学的考察による想像力の考である。彼は想像力を以て主観と客観の一致による創造力とする。換言すれば想像力は、芸術創作に関する人間の根本的精神機能であって、客観的対象を調和統一した全一体として把握する直観的綜合機能と考えたのである。それからまた「想像力が美として把抑したものは真である」と云ったキーツの思想がある。

* コウリッヂは imagination と fancy の性格を「文学的自叙伝」Biographia Literaria (1817) の第一三章に於て論じているが、殊にその最後の所に於て、我々の知覚(パーセプション)は決して受動的でなく創造的であること、従って我々の世界は我々自身が作って行くのである。こう云う心の創造的な働きを彼は第一次的想像力 primary imagination と呼び、次に創造された物を更に調整してこれを理想化し統一せんとする心の働き、こう云う心の再創造の働きを詩に於ける第二次的想像力 secondary imagination と呼んでいる。

こう云ったシェリー、ワーズワース、コウリッヂ、キーツ等が英文学に於て占めている想像力に関する流れに於て考えるとき、ブラウニングの持つ想像力は特異な存在であったことが分るであろう。

今、想像力に関してシェリーとブラウニングを比較して見るならば、完成的美或は理想的真理の世界と多様な人間的行動或は動機との関係を認識し把握する手段としての同じ想像力であっても、シェリーに在っては、それは霊感によって神来的に発動し、愛の姿となって広く人間性に滲透して行く感性的なものであるに反し、ブラウニングに在っては、同じ感性的な愛のうちにも、多様な人間性の諸相のうちに自己を掘り下げて絶対に向おうとする自己沈せん的な意志の力が強く看取される。だからブラウニングが描写する「語り手」の性格はいつも自己沈せん的な態度をとり、独語の形式によって見えない者に話しかけると云った手法を選ぶ、即ち想像的聴者を仮設して、それとの会話の

交流によって「語り手」の性格が深化発展して行くのである。こう云った詩の上にあらわた一人の「語り手」と、詩には見えない「聴き手」との交流と云う特殊な劇的手法によって却ってその詩の主観的な、抒情的なものが強調されているのが「劇的独白」であっ、それは取りも直さずブラウニングの創造的想像力の姿である。

(二) ブラウニングの恋愛詩の一特質

今まで見てきたように、感性的なもののうちに絶対的なものを求めようとするのがブラウニングの想像力であるが、そこに一つの問題が考えられる。それは絶対と有限との関係、即ち所謂彼の神秘主義(ミスチズム)に関する問題である。ブラウニングは「ポウリン」や「パラセルサス」に於ては、徒らに完全な真や美に憧れる空想的な心境であったが、「ソルデロ」にあっては、世間の荒波の経験を経て、不完全のうちに完全を、有限のうちに絶対を観ずる心を体得し、博く人類愛のうちに完全を求めようとする境地を得たのであるが、同時にこれを以て詩人の理想としたのである。そしてこう云ったブラウニングの思想は彼の凡ての詩の底流となっているが、これから彼の恋愛詩について考察して見よう。

「イーヴリン・ホープ」Evely Hope(一八五五)では、四十八歳の中老の男が、日頃意中に抱きながら、遂に愛の告白をなし得ないうちに死んで行った相手の十六歳の少女が横わる死の床の側に坐って、少女に対する愛の痛切な独白をするのである。少女の存命中は彼女の愛を得られなかったが、それでも男は無駄とは思わない。墓場のこちら側では彼女を得られなかったけれども、その得られる時は先の世に於ていつかはやって来るだろう。此処にブラウニング特有の思想が見出される。今日自分の手に捉えられないで、捉えられる時が今後に延ばされているもの程貴いと云った思想、これは「シンポウジアム」Symposoum に於て述べられている愛の永遠性に関するプラトンの思想を憶い出させる。今この詩の中の男は、この世では少女と結ばれなかったが、来世で二人の魂は結ばれると固く信じてい

る。爰に、この世は不完全であって、我々人間の凡ての希望はこの世では達せられないで来世で達せられ、完成は全て未来にあると云ったブラウニングの哲学が見られる。そして現世に於ては来世の完成を期して成々は努力するべきであると云うのであるが、これはブラウニングの詩全体に流れている基調であって、人口によく膾炙されている思想である。完成を獲得するにしても（この詩では恋人を得ること）求める者の魂は多くの生涯を通って行かなければならないのである。そこには「ポウリン」や「パルセサス」に見られるような一攫千金を夢みると云った所はない。こう云う風に魂が多くの生涯を経て完成されると云う思想は「ソルデロ」（第四章）に至って始めて生れた思想であるが、ここに引いた恋愛詩にもそれが強くあらわれている。この連続せる生涯の彼方と云った思想はブラウニングの恋愛詩の主流と考えられているが、と同時にこれとは反対の流れがあることを見逃してはならない。それは次の詩を考えて見よう。

「廃墟の恋」Love Among the Ruins（一八五五）である。そこでは、ローマの古都の廃墟の夕闇に包まれて二人の恋人が相擁している場面が描かれている。その際の二人の魂の法悦境に較ぶれば、そのかみその場所で演じられた数々の栄華や、愚行や、犯罪は何等の価値もない。その永功恍惚の瞬間こそ「恋こそ最善なれ」Love is best！だと云うのである。これは現世に於て永劫が実現した瞬間に関する考え方である。こう云うた永劫の瞬間的実現の思想は亦短詩「最高善」Summum Bonum（一八八八）によくあらわれている。人間の最高善はこの世の財宝でも、栄誉でもない。宝玉よりも輝かしい、真珠よりも純な真理は、一人の純潔な乙女との口づけの瞬間であると云うのである。一つの実現から他の実現へと向う所の連続せる生涯の彼方の思想には、時間の継起が看取されるが、これに反し永劫示現の瞬間の思想には時間の超越が感じられる。

こう云った時間と永劫に関して相反する二つの流れがブラウニングの詩のうちに見られるのであるが、この二つの要素が同一の詩の中に見られるのがある。それは「最後の合乗り」Last Ride Together（一八八五）である。この詩

では、男が女に愛を告白してはねつけられるのであるが、それに失望せず自分の身が醇化されるような幸福がこの世に約束せられていても、その幸福を得るには人は彼の世に旅しなければならぬと云っている。これはブラウニングの主調である連続する生涯の彼方への思想であるが、直ぐその次の節(スタンザ)では、或る瞬間に初めて参見する人生最良の状態を、若しとこしえに続けることが取りもなおさず天国であるとしたならばどうであろう、即ち、女と自分とがこうしてとこしえに馬に乗っている状態が天国であるとしたらどうであろうと男は独白する。そこに瞬間の恍惚に天国と永劫を感じる心、即ち瞬間の永劫化の思想が前節と対称的に強調されている。併し時間と永劫との関係に於けるこう云った瞬間の永劫化の思想は、プラトンのイデア論と趣を異にしている点に注目しなければならない。と云うのはブラウニングの想像力は時間と永劫、有限と無限との間に行きつ戻りつし、一度瞬間的に絶対の姿を捉えるが、やがてその瞬間は消えて連続する生涯の彼方に絶対の姿を遠望するのである。

ブラウニングに於けるこの有限と無限との関係をワーヅワースのそれと較べるとまた興味がある。ワーヅワースの「永劫暗示の頌詩」Ode of Intimations of Immortality に依れば、子供は神の光雲をなびかせながらこの地上にあらわれ、永劫の幻に包まれた存在である。そしてこの幻は年を経るにつれて薄れて行く。所がブラウニングの栄光は一旦瞬間的にあらわれるが一瞬また、我々は年の経過につれて段々とその光に近づいて行こうとする。だから永劫の瞥見は、ワーヅワースに在っては我々から徐々に消えて行くもの、即ち感能と、感能に触れる外界の物象に対する我々の疑念 obstinate questionings of sense を通してであるが、これに反しブラウニングに在っては我々自身の経験の観察から、云わば理性的推理から生れるものである。とに角こう云った「連続せる生涯の彼方へ」と「瞬間の永劫」と云う相反する二つの要素から成るブラウニングの二元論(デュアリズム)を看過してはならない。過去の批評は主として「連続せる生涯の彼方へ」か、或は「永劫示現の瞬間」の何れかの一面に立っていたが、近来前述の二律違反に着目して、何故こう云う矛盾がブラウニングに生じたのだろうかと云うことを心理的に探究しようとする傾向が生れている。そ

の著しい例はダックワース F. R. G. Duckworth (Browning—Background and Conflict, 1931) の評論である。

従来のブラウニング批評のうち、先ず十九世紀時代をブラウニング在世中と、その死後一九九〇年代の二つに分つことが出来よう。第一の時期は、所謂ヴィクトリアニズムが支配しブラウニングに対する批評は毀誉褒貶の半ばした時代であって、その間彼を称讃したものはカーライル Thomas Carlyle、ロセッティ D. G. Rossetti、アーノルド Matthew Arnold、ラスキン John Ruskin 等の有名文人であるが、一般の読者にとっては彼の詩は不道徳であり、難解であると云って不評判であった。第二の時期で彼を称讃した有名文人はモリス William Morris、スウインバーン A. C. Swinburne、ワイルド Oscar Wilde、ショー G. B. Shaw、キプリング Rudyard Kipling、ペイター Walter Pater であって、殊にファーニヴァル Dr. F. J. Furnivall によって「ブラウニング協会」Browning Society が設立されてからは、シェイクスピアの再来とまで神格化された時代（八十年代から九十年代の初期）であった。その代表的批評家はネトルシップ J. T. Nettleship とオーア夫人 Mrs. Sutherland Orr である。

ヴィクトリアニズムの観点から見れば、活動生活と進歩思想、愛国心と楽観主義をうたったブラウニングは明かにヴィクトリア朝人であったが、と同時に彼のうちにはヴィクトリア朝的でない要素、即ち「彫像と胸像」The Statue and the Bust（一八五五）によって代表される不徳的なものが存在している。こう云った一面が、ヴィクトリアニズムの世界にあってブラウニングが不評判であった所以であることは先に指摘した通りであるが、而かもこの一面の価値を十九世紀の思想家達、殊に十九世紀英国繁栄による物質主義に対して起った幻滅の時期の批評家や世紀末時のデカダント達によって見逃がされたのである。

こうして時移り一九二〇年代は反ヴィクトリニズムの時期となる。従ってブラウニングに対しても否定的批評が起り、彼の楽天主義に対してはストレッヂズムからの反省が投げかけられ、また彼のローマンチズムに対してはバビット Irbing Babbit 一派の反ブラウニング批評が勃興したのである。このようにして一般批評家達は、一早くスウイン

バーンによって指摘されたブラウニングに於けるヴィクトリア朝人らしくない面を見逃がしているのである。例えば「市に於けるフィフィン」Fine at the Fair（一八七二）の楽天的でないもの、「ソルデロ」のロマンチックでない愛と云ったものは余りと上げていない。殊に二十年代に始まった純粋詩の新風や形而上詩の傾向、或は潜在意識を扱う立場にある人々によっても、ブラウニングの所謂楽天主義やロマンチシズムの背後に見られる如上のヴィクトリア朝人らしからざるものが取上げられていないのである。換言すれば今までの批評家は、前述したように、何れも「連続せる生涯の彼方へ」と云ったブラウニングの楽天的・活動的の面か、或は「永劫示現の瞬間」と云った恍惚的、神秘的の面に立っている人々である。

即ち、ブラウニングは活動詩人であって、現世は失敗や不成功で充ちて居り、未来の完成を目指して努力する（現世に於て完成が得られるなら努力や活動の必要がない）、即ち「連続せる生涯の彼方」に理想をおく思想を以てブラウニングの特色であると云うのが批評の伝統であった。だからその詩句のうちにはキビキビとした行動や活動に充ちたものが見られるが、同時に静平と、平隠と、静観と沈思が窺われるのである。これはブラウニングが十七世紀形而上詩人ダン John Donne を愛読した面のあらわれであろうか？　また彼には、例の「連続せる生涯の彼方へ」の思想と同時に、彼の恋愛詩に於て指摘したように、現在の危機的瞬間に於て永劫を見出す、即ち「瞬間の永劫化」を体験すると云った神秘的な面がある。

一体神秘主義と称せられるもの、即ち時間と永劫、人間と神との接触に二つの形態が考えられる。その第一は、人間が神に、時間が永劫に完全に融合されて永劫或は神の幻影が出現する。これが通常云われている神秘主義であって、但しこの境地には人間と現実世界とを引き離すと云う精神的危険が存在する。その第二は生死或は恋愛などの危機に際して瞬間的に永劫が訪れるが、その際人間は神に吸収されず、あくまで個性を失わないで人間の現実性を維持している。ブラウニングの「瞬間の永劫」と云う神秘主義はこの第二の種類に属するものであるが、こう云った神秘

主義に対して従来いろいろの批難が生れている。抱擁した男女の恍惚境が即ち寂光土と云った考は余りに神を冒瀆した知恵のない態度であると難じる批評は、バビットの流れを汲む人ばかりでなくT・S・エリオットからもなされている。殊に執着否定の上に立つ神秘主義者オールダス・ハックスレイも、ブラウニングの神秘主義は擬似神秘主義だと彼の小説「幾夏を過ぎて」After Many A Summar（一九五〇）の中できめつけている。ハックスレイに依れば、ブラウニングは余りに神のことを喋り過ぎると云うのである。男女の睦言にも、夫婦の諍いにも、何とか云えば神に関する文句が飛び出す。それに較べるとチョーサーの人物描写には、無駄口もなく、大げさな所もなく坦々として客観的な所が実に美しい。それは人間の欲望の偽らない姿である。所がブラウニングにあっては、人間の欲望即神と云う態度で鼻持ちならぬと云うのである。無執着即永劫を念じるハックスレイに取っては執着即永劫の態度は耐えられないのだろう。こうした色々の批難は、只瞬間の永劫化と云う一面丈けから考えれば妥当な言葉であって、彼の在世中から投げられた彼の詩の不道徳性の批難も、こう云う一面から生れた詩篇に投げられた言葉と考えられる。だが先述したように、この瞬間示現の永劫と一見相反する連続生涯の彼方への志向が存在することを想起し、ブラウニングのこの二律違反的想像力の意義を考慮しなければならぬ。一方の瞬間の永劫化はあくまで瞬間的であり神来的であって、そうしてその境地は人間の個性が直観的に到達する感性的なものである。而かもその瞬間は生命の白熱する自己破壊的な瞬間であって、現実に於てはそのままの永続は許されないだろう。それが瞬間的存在の所以である。ここに於てブラウニングの想像力は瞬間的な完全な感性よりも、不完全にして多様な人間の感性を通して幾多の生涯の先きに絶対を遠望する理性的、意志的な方向を辿ったものと考えられる。この二律違反的なものは前述したシェリーとブラウニングとの間に見られる詩的想像力の性格の相違を思い合わすとき、ここに亦ブラウニングが劇的独白と云う沈せん的芸術形式を採った所以が窺われて深い興味が感じられるのである。就いては次にブラウニングの想像力、或は詩的精神に関しもう少し考察して見よう。

＊ ブラウニングにあっては、神は宇宙に遍在し人間の世界に出現するけれども、人間が神に決して吸収されることはなく神の世界と人間の世界とは判然と区別され、人間はあくまでその個性を失わない。例えば Karshish (1855) のラザスは蘇生後も人間として地上の法則に従って生活しなければならなかったのである。彼が接した神の幻影は地上では何等役に立たない。これは神に接するや人間は全く変貌され地上の生活が全く歪められると考えられる一般の神秘主義と異っている。ブラウニングの恋愛詩や「市に於けるフィフィン」の或章句に於けるように個人の完成に他の個人を必要とする場合でも、一方の個人が他の個人に決して融合されない。このように神の栄光の出現に際して、必ず確固たる個性を必要とするのがブラウニングの神秘主義の特徴であり、彼の詩の何処に於ても人間が神に吸収されることは絶対にない。例えば、個人は肉体の死に於て永らえるかを問題にしている La Saisiaz (1878) に於てすらも、その人間自身は決して神に吸収されないのである。

(三) ブラウニングの詩心

ブラウニングの想像力、或は詩的精神を考えるに当って、先ず注意しておかねばならぬことは彼の詩人としての生活態度である。ブラウニングは他の詩人の作品に対しては大いに論じたり批判もしたが、自分の詩は他人の前で朗読することはあっても、それに関して人と論じることもなく、また自分の詩に対する他人の悪評に対しても決して弁明しなかったと云うことである。自分の詩作に関して誰にも余り話さなかったことに就いては、例えばグリフィンとミンチン Hall Griffin and Minchin のブラウニング伝に出ている The Pied Piper of Hamelin (1842) にまつわる話——この物語の筋は元来ブラウニングが彼の父から暗示されたのだが、その原稿が出来上るまで一切口外しなかったとか、それからブラウニング夫妻の恋愛初期に二人が交わした手紙の中では、エリザベスの示唆に拘らず彼は自分の詩作については決して雄弁に語らなかったとか、殊にフローレンス時代の生活を見ても、妻以外には決して自分の詩作に就いて相談しなかったのである。次にブラウニングが批評家嫌いであったことは一八四二年の Alfred Domett 宛の手紙にも、また後述するように Pacchiarotto (1876) の中にも窺われるが、要するにテニスンが批評を非常に気

にして改作した態度と異って、批評家の云うことは余り問題にしないで、釈明も弁護も余りしなかったのである。それからネトルシップ J. T. Nettleship (Saul (1845), Child Roland (1852) に関し) やオーア夫人 Mrs. S. Orr (The Statue and the Bust (1854), Another Way of Love (1855), Parting at Morn (1845), Sordello (1840) に関し) の詩の解釈の間違いに対し寛容であったように彼は滅多に弁明しなかった。だが弁明の稀な例としては、彼の詩の難解と云う批難したラスキンに出した手紙の中で、詩人は神を相手にするものであって、読者や批評家に理解して貰うために、自分はこの態度を捨てないと云っているが、こう云ったブラウニングの態度には、ラスキンが恰も詩人と神との間に出しゃ張ったことに向っ腹を立てているような所がある。こう云う態度は彼の詩の難解と云う批評に関して出した大低の手紙の中に見られるのである。また、ブラウニングは、自分が書いた詩句の意味が自分にも分らないことが時々あって、その際彼の云った「さあその意味が分るのは神丈け」と云った言葉は有名である。それからケンブリッジに於けるブラウニング心酔者達が彼の難解詩句研究のため「ブラウニング協会」を創ったが、ある時彼もその会合に出席して難語句の説明を求められて説明が出来なかったと云うことである。

こう云ったブラウニングの自分の詩作に対する態度の数々を見ると、どうも彼の詩と云うものが彼の実生活から遊離しているように思えるのである。この点を裏付けるものをもっと彼の詩の上で探って見るならば、第一に先述の Pacchiarotto である。その中でブラウニングは、世間の批評家達が彼の詩を勝手に解釈したり、また彼の詩は彼自身をあらわしていると解釈する彼等の態度を批難している。これと同じ主題は House (1876) のうちにも繰返されている。それは、詩人の作詩は一つの閉ざされた世界であって、彼自身の考えたり感じたりするものは見られない。家の内部は分らないで、家の外部に見られるもの丈けであると云う。これ等二つの詩が云っていることは、ブラウニングの手紙や会話のうちで毎々云われていることと同巧異曲である、即ちブラウニングの作詩の本質は劇的(ドラマチック)であること、これは想像的人物の表現であって決してブラウニング自身の意見や感情の表現ではないと云うのである。ここに彼の

詩と生活の遊離を暗示するものが看取される。それから「店」Shop（1876）と云う詩である。これは或る死んだ商人に向って話しかけられた独白詩である。彼の陳列窓（ショー・ウィンド）に出してある色々珍らしい豪華な品物から察して、この詩の「語り手」は、この商人はすばらしい私宅を持っているに違いないと考える。所が実際はそうでなくって店そのものが全部で、この商人はたくさんな陳列品のうしろの壁に穴を開けてそれを住み家として暮していたのである。ここに「語り手」は考える。こう云う商人の生活はいけない。単なる取引丈けでなく、その外のものを生のうちに持たなければならぬと云う。例えば肉屋は画をかくとか、パン屋は詩を作るとか、ろうそく屋は歌や笛（フルート）をものするとかと云った具合である。この詩では詩人に就いて云われていないが One word More（1855）、では、ラファエルが画に倦いでソネットを書こうとし、ダンテが同様に天使の絵をかこうとしたように、詩人も詩作のみに擁わると倦きるから何か外のことをしようとする。これは一般に芸術家なるものは自分の芸術丈けに満足せず、その芸術家たることを止めて人間であろうとする、芸術家の苦しみを捨てて人間の喜びを得ようとするからである。そこには芸術家よりも人間が偉大であり、詩そのものよりも生活の方が偉大ではないかと云った問題が暗示されている。これと同じ趣旨が The Last Ride Together（1855）にも In a Balcony（1855）にも、The Two Poets of Croisie（1878）にも見られる。

かくこれ等の詩篇からも、ブラウニングの詩は彼の生活から遊離していたことが暗示され、従って自分の詩作に関して彼の生活に於て無口であったことが成程とうなづかれるのである。何れにしてもブラウニングは、創作の際の詩心を反省して人に語ることを余りしていない。従って彼の詩心を知るに足る彼自身に依る文献は余り存在しない。よって今彼の詩心を探るために次の三つの方法を取る。

㈠　一八五一年に発刊された偽作「シェリー書簡集」に附されたブラウニングの序文「シェリー論」とシェリー作「詩の弁護」に依る論考。

㈡　或る時期のワーヅワースとキーツの両詩人とブラウニングとの比較

㈢ 「パラセルサス」と「ソルデロ」にあらわれたブラウニングの詩心

以下順を追って考えて行く。

㈠ 「シェリー論」から出発し「詩の弁護」に言及しながら、シェリーの影響から展開発展して行ったブラウニングの詩的精神に就いては既に「劇的独白の契機」（四七頁）に於て論じておいたから該項を参照され度い。

㈡ ワーヅワースの詩心に関して、ここでは「序曲」The Prelude 巻一にあらわれたものを見よう。真実を表現しようとする時の詩人の心は、丁度恋人のように、何か抑えられないものに取りつかれ、その強い衝動に駆り立てられて落着かない不安な困乱状態に陥る。そうして詩人が何等からの主題に関してなそうとする詩作が、この心の困乱のためにその正道から外れ勝ちである。このように創作時の心の不安が詩人の詩作に影響を及ぼすのであるが、またもう一つ詩人の創作に影響を及ぼすものがある。これは詩人の一種の利己主義と云ったもので、折角彼が真実への憧れを抱いていても、その時表現と云う重荷から逃避して、年月を経るに連れて得られる精神の成熟と洞察力の明晰に依頼しようとする安易な心である。だがこの心は詩人のもつ凡ての力を封じこめようとする。こう云った詩心の妨げとなる不安と利己主義とから脱却して、詩人は真実に向って完全な謙虚と純真と誠実とに没入する。換言すれば、絶対的自己放棄の境地に入ることが創作活動の第一条件であると云う。このようなワーヅワースの詩的経験は、またキーツの手紙のあちらこちらに散見する。コルヴィン Sir Sydney Colvin は彼のキーツ論の中で「キーツはエンディミオンの中で、自分の未熟の魂が耽ける沈思や憧憬を、心の不安や高揚を伴う出来事や心像に余り多く注ぎ込んだために筋に困乱をかもしたのである。それから三年後に病床からシェリーに宛てて書いた手紙の中で、そう云った心境を現在に較べると宛で散乱した一組の花札である」と云っているが、これは正に詩人が創作の際に覚える不安な心境に該当している。この創作時の精神の困乱不安状態に関しては、キーツ自身も毎日の執筆後頭がフラフラし、精神はダラリとなり、意気は全く消沈し、徒らにあせって力がこれに伴わないと云った状態に陥入ると云っている。それに

対してキーツは最後に、詩人は受動的になり自己を放棄しなければならないと云った心境に到達したのである。これに関して「殊に文学に於て成功者を生む素質は、消極能力 Nagative Capability――事実や理由をいらいらと求めることなく不確実、神秘、懐疑のうちに安んじることが出来る能力である」とか、「目指す物も知識を求めてブンブンあちこち飛びまわって蜜を集める蜜蜂のようにあくせくしないで、花のように花びらを開いて受身に、且つ受容的になろうではないか」とか、また「詩的性格には自我がない――それは凡てのものであり、また何ものでもない」というキーツの有名な言葉が思い出される。

ブラウニングも亦、ワーヅワースやキーツのように、創作時に困乱と不安を覚え、また彼の心を駆り立てる発作衝動を感じたのである。こう云った彼の神経質的興奮性を裏書きするものとして、ブラウニング夫人の手紙によれば、彼は感興の湧くのを待って発作的に仕事する。その時の彼のいらいらした神経興奮と苦しそうな反芻状態は、まるで壁上にとまっている一匹の蠅が彼にとって見る〳〵内にとかけの怪物に拡大され思わず壁に頭をぶっつけて血を流しながら苦闘しているようで、その苦しさを紛らすために彼は何か手仕事をすることを望んだと云うのである。だから彼が粘土細工や彫刻をなぶるようになった時、夫人はホッとしたのである。それからオーア夫人によると、ブラウニングはああ云った神経質的興奮の余り、友人を訪問してもどうして応接室へ這入って行ったものかと惑ったことが屢々あった程である。併しこのブラウニングに於ける創作時の精神の困乱はワーヅワースの場合と多少異って、そこにはもっと大きな困難を伴っている。ブラウニングに在っては、ワーヅワースやキーツの云う完全な自己放棄によって得られる詩の純粋境地に這入ることが困難であるばかりでなく、一種の強い恐怖感に襲われる。詩人が真実の幻影（これを彼は「白光」white light と名づけた）に接して生じる精神的危機に就ては Bishop Blougram's Apology (1855), A Death in the Desert (1864), Karshish (1855) のうちに詠まれている。これ等は夫々世俗的なローマ司教、聖ジョン、アラビア医学生に関する詩であるが、同時にブラウニング自身に帰せられるものである。即ち白光に面した時の

彼自身が覚える強い精神的苦悩をあらわしているのである。かくブラウニングは、ワーヅワースやキーツのように白光に接して完全に自己放棄が出来ず、危険と恐怖を伴う強い精神的動乱を感じるため、その白光から逃れようとする方向に彼の心は向っているように感じられる。然らばこの方向は具体的にどう云う形を呈しただろうか？　次項によって考えて見たい。

㈢　「パラセルサス」と「ソルデロ」に現われた詩的精神――先ず「パラセルサス」の中の詩エイプライルは、自己の能力と手段がこの世では限定されているに気づかないで、凡てのものを一挙に享受しようとする憧れに取り憑かれて焦燥する人物であるが、これは亦それを書いた二十三歳のブラウニングの心境を無意識に反影しているものと考えられる。こう云うブラウニングの一面は、エリザベスに送った手紙の次のような文句からも窺われる――「全てのことをしなければ何事もし度くないと云うこと、全てを洩らさず眺め、手に入れ、楽しまなければ何事も眺め、手に入れ、楽しまないと云うことは真に愚かなことでありますが、これは私のずっと古くからある――実際、原始的肉体の重要な部分となっているのです」。ソルデロも亦こう云う自己の妄想の犠牲になった詩人の例である。そして彼は、精神（スピリット）の持つ無限の力のために圧倒されて彼の有限の弱い肉体が破壊されるのであるが、これは亦若き日のブラウニングが創作の際、その精神的緊張による興奮と焦燥のためにいかに肉体的影響をうけたかを、彼のエリザベス宛の手紙の中で語っている所に該当している。

このように凡ての真と美を捉えようとして充されず、それから生れた焦燥に身をこがすエイプライルやソルデロは、半ば天使のように太陽に向って生命の喜びを歌う鳥ではなく、恰も光に向って我むしゃらに突進する蛾である。白光に向うが、その恐怖に慄きやがて焦げ焼かれて死んで了う。か弱い、限られた肉体は凡ての美と真を限られた時空の世界の中で、一挙に実現しようとして圧倒する精神に破滅を招いたのであった。併しソルデロは、飛んで火に入る蛾のように破滅から身を退くことが出来なかったエイプライルと異って、同じ死に際してもおそ蒔きながら一つの

覚りに達したのである。これは「ソルデロ」第六巻に描かれているソルデロ最後の場面であって、彼は父タウレロ・サリンゲラから帝王の徽章（バッチ）を提供された時、それを受けたものかどうか、過去、未来をいろいろ思いめぐらし、片やそれを受けて恋人パーマと世の権威を得るべきか、片や自分の良心と民衆のためにそれを受けないでおくかと思い悩んだ末、その精神的緊張のために倒れる。その死の瞬間に彼は自分の失敗の原因と、失敗救済の道を覚るのである。即ち彼はこのような精神的危機の瞬間は彼の理想とする真実の姿、即ち永劫の出現を直観するのだが、この瞬間的永劫の衝撃を抑制しなければ、即ち無限を有限に適合させなければ身は死の危険に瀕することを知ったのである。換言すれば、限りない人間の希望は或る程度抑制しなければならない、そしてそのためには所謂白光の一部を犠牲にしなければならぬと云う。こう云った抑制と犠牲とは如何にして実現されるだろうか？　ここにソルデロ即ちブラウニングは二つの辿るべき道を発見する。その第一は、人間の限りない希望と理想、即ち白光の幻を限定された現実の環境に即応させて一の生涯から一の生涯へと進んで行くことである。ここに我々は、ブラウニングの想像力の二律違反的な連続せる生涯の彼方の要素と瞬間の永劫の要素との調和の姿を看取し、活動詩人の面と神秘的観照詩人の面との融合統一が見られ、そこに永劫の示現は時間を必要とすると云った永劫と時間との有機的関係を発見するのである。白光の危険を避ける第二の道としてブラウニングが選んだものは人類愛である。これは、前述したように彼の青年時代にシェリーの影響によるものであって、ブラウニングの手紙や伝記からも分るように、彼は人類を助け、励まし、慰めることが詩人の最高目的であると考えたのである。詩人は幸福の世界に独り、遠く世間から離れて住んではならない。美を人に伝えなければならぬ。だが美は全体の、完全な姿では伝えられないで、一部宛しか伝えることが出来ない。そこでブラウニングは作品に於て一人或は数人の人物の心中或はそれ等が語る言葉のうちに動いていると考えられる美の形であらわしたのである。こう云った美の限定或は犠牲の上に立ってとられた文学的表現形式が彼の所謂劇的スタイルなのである。だからブラウニングの云う愛は、肉欲に捉われない洗練された所謂プラトニックなものと

か、或はシェリーの愛のような無形にして奔放な愛ではない。またそれは理性(リーズン)と対立するものでもない。例えばパラセルサスのように、理性の完成を目指す時は自ら愛を失うというようなものでなくって、愛と理性とは相互に調和して離れないのである。真と美の理想欲求に燃えるが現世では限定された人間であるソルデロにとって、時間と空間と肉体が自分の能力に課する限度を受け容れさせるものは外ならぬ愛である。「凡ては美である」All is beauty と云って世の人の美を発見することが愛あって、そうすることによって人間は自己の美の理想を実現することが出来る。なぜなら自己の理想は限定されている自分では実現出来ないからである。こう云った限定の観念の上に立つ愛こそ我々を我々の環境に融合させるものであって、この愛によって我々は慰められ、生きて行くことが出来るのである。だがこの愛は単なるロマンチックな愛ではない。成程ブラウニングの詩にも、悟性や理性の否定、感情の尊長、抑制と秩序の嫌圧、現実生活の逃避と云ったローマン主義の特色は見られ、シェリーを捨ててクラッショーを取ると云った反ローマン主義者、例えばバビットは、ブラウニングの感情的価値は歪んでいるとか、正しい理性に欠げているとか、感情を抑制しないで儀礼に欠げていると云ってブラウニングの精神の軟弱性を批難しているが、「ソルデロ」のうちにはそう云うローマンチックなものは見られないで、そこに見られるものは先に見て来たような新らしい愛の精神であって、それは所謂解放者としての愛ではなく、正にその反対で、限定の観念に立ち不快な現実を避けないで、それに人間を融合させようとする抑制力が伴ったものである。

そして先述したように、こう云った美の限定の上に立つ愛の精神からブラウニングの劇的スタイルが生れたのであるが、これは亦詩的精神の中心となっている白光*に直面した際詩人が感じる困乱、不安、恐怖と云う精神状態に関連する問題で、その際ブラウニングが、白光を避け、これを分光色*prismatic hues に分解してあらわしたのが劇的スタイルなのである。彼が自分の詩作に就いてエリザベスに書いた手紙の中の次の文句はこの間の消息を雄弁に物語っているものと云えよう。

「貴女は御自分を歌われますが、私は只男や女の人物に語らせます。私は真理を分光色で現わします。その清らかな白光――仮令自分のうちにあるものでも――が恐いのです。だが私はその白光をものして*見たいと思います。」

* 白光とは、右の手紙の文句にあるブラウニングの劇的スタイルの詩を意味する分光色に対立して考え出された陰喩（メタファー）の言葉であって、これは亦彼が若い頃傾倒したシェリーの云った句「永遠の白光」The white radiance of eternity から来ているのかも知れない。そしてこれは絶対真理とか全体真理を意味し、哲学的に表現すれば、我々の経験全体を統一、調整、綜合されたものであろう。だがブラウニングは哲学者ではない。哲学者は真理の追求に際し弁証法とか、分析論理とか、推理作用を使用する。これに反し詩人は直観と幻想とに依存する。哲学者は真理の前に横たわる深淵に骨折って架橋工事をやるとするならば、詩人は深淵を一足飛びに越えようとする。だから詩人が究極真理と云う白光を参見すると云うことは、論理的に云えば、詩人の経験の整調・調和と云うことであって、それは亦神秘家が至上神の本質とする統一の境地であるが、この経験の調整、或は統一を論理家の弁証法によらないで詩人の直観によって達成することはブラウニングにとっては、いろいろ困難を伴うからそれに一挙に向う努力は抑制されるのである。それから神と真理の栄光である白光は人間の精神に苦痛や危害を与えると云ったが、これはワーズワースの「永遠を識る頌」Ode on Imitations of Immortality (1807) の中にあらわれた思想と異る。その中でワーズワースは、子供は神の無限の輝かしい幻影に浴し、その栄光の雲を引いて地上に生れると云っているが、ブラウニングの考では、人間は生れる際に神の栄光の一閃を受けて身に傷をうける。それで人間はこの世に生きて行くためにはこの傷を癒やし、再びこの危害をうけないようにせねばならぬ。(Bishop Blougram's Apology) そしてワーズワースに依れば、子供が持って生れた栄光は年が経つにつれて曇って行くが、ブラウニングに依ればそれとは逆に年が経つにつれて神に対する人間の視力はハッキリするのである。換言すればワーズワースに在っては感覚を通してうすれ行く永功の姿に想到するが、ブラウニングに在っては経験の観察とその合理的推理から永功に達しようと努力し、人間とその周囲に展開する愛のうちに永功が示現するのである。

** ブラウニングは元来自分の思想・感情・信念を詩にうたわなかったが、一八四五年二月から一八四六年五月に至る間エリザベスと取交わした恋文の中で、彼自身の真理、即ち白光について歌おうと云う決心を七度も洩らしている。その結果実際に発表されたのは一八五〇年の Christmas Eve と Easter Day であるが、前者は恋文中に見られる彼の決心によって白光を歌うことを以て始められているが、後者に至るうちにブラウニングに或る変化が生じて作は劇的になっている。即ち、

白光色でなく分光色となって来て作中の人物が語るように変って来ている。

以上ブラウニングの詩心に就いて色々考察して来た所から詩人としての彼に関し要約されることは、彼は活動的詩人と瞑想的詩人の二要素から成立すると云えよう。抑々活動的詩人とは時間と空間の世界の詩人であって、この世界では理想が実現されることは軈て活動の終熄を意味するから、この詩人は永遠の未来に於て理想の実現を期待する。またこの詩人は個人と具体を重んじ、時間と空間に於ける創造物を尊ぶから、彼は個人の身辺に起る凡てのことを取り上げ、それに関する好奇心に強く燃えている。之に反し瞑想的詩人の心は時間と空間の世界を飛び越え、各瞬間に無限と永遠を求める。こう云う詩人によって捉らえられた真や美は永久に消滅しない。この境地は独立した理性によってではなく、神との直接霊交によって得られる。その際詩人の精神と詩語とは決して不安と多彩なものではなく、静寂で瞑想的である。しかも彼の詩心は不活発でなく緊張している。但しこの場合、キーツのように、過度な好奇心と欲望を抑え、自分の面前を横ぎる凡ての物を静かに眺めているのである。所がブラウニングはこう云った典型的な瞑想詩人ではなく、白光の世界を瞑想する傾向が非常に強くて、その際彼の精神は独特の困乱と苦痛を覚える。そして彼は身心に及ぼす害を恐れて白光から身を避けようとする。従ってブラウニングにはキーツのような静かな、受容的態度が見られないのである。その結果、㈠ブラウニングの上に肉体的不安や、頭痛や、神経痛と云った肉体的影響を受ける。㈡彼の詩の上では、活動的詩人の要素が強く働いて瞑想的詩人の要素を牽制する。だから彼には活動的な詩が多く見られ、神秘的な詩は少いか或はあっても断片的に見られる。換言すればブラウニングはキーツのように白光を完全に受けいれることが出来なかった為に、真と美を全体的に伝えられず、これを分光色として少し宛伝えるために劇的な方法を取ったのである。だからブラウニングの詩は、彼に内在或は示現する偉大な力、即ち白光がそのまま十分発揮出来ないで、彼のうちに抑圧された姿を歌ったものであると云うことが出来よう。㈢ブラウニングの生活

では、前述したように、彼の詩が遊離していた。ラスキンに答えて彼の詩は神と彼との間の問題であると云った言葉は、彼の詩が外の誰にも分らぬ神聖なものであると云う意味でなく、詩作の時彼は非常な困乱と不安を感じ、それは他人が関与出来ない所の彼独得の詩作境地であると云う意味である。彼はその苦痛を避けようとして日常生活に帰って行く。そこから彼の詩と生活の分離が起ったものと考えられる。だから詩の上の彼と実際生活の彼とは非常に異っている。その例として Abt Vogler から想像された深遠な詩人としてのブラウニングは、実際会って見るとメリー・グラッドストーンの眼には、一介の俗物とか市民としか考えられなかったのである。只こう云う分離していた二面が比較的に融和してたと思われるのは、エリザベスとの結婚生活の間丈けであって、ブラウニングの傑作もその時期に発表されたのである。即ちその間彼はエリザベスによって真理の部分的なものよりも全体的把握とその表現の境地に達しられそうな信念を刺戟された。だが遂にそれは実現しなかった。その真理の境地は時折その白光を瞬間的に瞥見することは出来たが、キーツのように自己放棄が出来なかったために遂にその楽土は遠くから眺める丈けで遂に到達することは出来なかった。この意味でブラウニングは遂に、「不死示現の頌」や「ティンターン寺院」Tintern Abbey をうたったワーヅワースや、頌詩（オード）や、ソネットの作者キーツと同列の詩人とは考えられないのである。だがこう云ったワーヅワースやキーツの偉大さは無くとも、困乱と不安に駆り立てられて書かれたものを作品中から除いて考えれば、ブラウニングにも彼としての偉大さはある筈である。と云うのはブラウニングは道徳破壊者であるとか、智恵の足らないローマンチストであると云った前世紀中葉から今世期始めに於けるブラウニング批評家の言を無視しても、万物の生命に関する洞察力と白光に対する闘志との点から云って今尚強く我々に訴えるものがあることは争われないからである。そうして我々はそう云った洞察力と闘志の上に立つブラウニングの沈潜的想像力から生れた劇的独白と云う彼独得の芸術的表現形式のうちに彼の文学的偉大さを見出ださねばならない。

（英文学評論第二輯『劇的独白』の続篇）